



へ利9
3869
61



利日
號 3869
卷 61

大正八年四月六日寄
室井平藏 贈

西
十



雑目

五橋

札の音羽の通さ終る

石膏

糸車も懸るに志す者

千蝶

蝶の袖襟小紋もの

梅點

同

益園

阿の玉の台せ續や生玉子

麟牛

ふもと若くも君の代の檜

石膏

庭持ふよみの工面久くと

青壳

同

大野

誰たあも皆圖こ初此出

作樂

春告若れむの引く年

生詩

木芽待箱てあふ折も尔

以珎

雑目

時冬くや流るる櫛の長し朝

寒房

おこさ流るる尔志うと初夏

石膏

他言はぬ鶴や防風をくらん

魚子

同

大黒やた月とふ所無方少

金絲

同じ脇の鼻れあてふ

文水

冬積を沖れ着風十中開ふ

羽涼

同

明の方ハ

い切り山嶽もあやふ代あ看

文水

さてせきをいお岩ふ川首

敗白

角おれをびるゝ人の踏ふ

石膏

同

初空や路も岸のくはて梅

封涼

舟のり魚はさ川並

石壽

逢津此品圖に帯几中にて

取自

同

万聲も年かぬより松の照

取自

膳のくおを寸琴は糸遊

羽京

曳溜の名を夕顔をよま

文水

守景

かたね帆や君子は易に

可耕

杜夫魚の柏子くつせや年引手流

竹葉

恙か一寸年そ友の袋書

羽京

天れ等招く層やまはく

取自

同

春より尾の鼻の尾長く煤拂

金糸

空のくふ龍は立波にこれ書

観水

空は又高輪は

文水

京方の子の
子れ新底と様小

尻字の蝶よてす存れを

幸化

山若や阿の海よきては冬の盆

佳吉

同

結成灰や白壁ハ一夜の暈碑

麟牛

小之室

意ししと井筒の友月二四 五七 十

梅點



歳暮

茶の枝木清濁いづれの花

十六 木志

年中小之月

子ハ二人お月ハ女ヲお七と云

観水

室柄ハ女ヲ流して母の乳房ガ

藤十

藤方七日

荒井の箱根十日豆乳音

龍角

歳旦

おひくは 東風の初色代々の常

観水

同

九月や世の上は牡丹咲けり

可耕

見ちりてはせぬ保の心燈

佳吉

母鳥の菊は菊は復して

石壽

雑日

看雲子

三つ多の厚く如く朝の

自一

腕は沙路の音をむすびて

扇月

慕くして氏は如く自嘆と云

蛙井

同

蒼玉亭

一箇乃唯々りては物

扇月

初春の巻かき庭を撫む

自一

おろくは忘と踊法とて

石壽

同

文會堂

九重を等しては

蛙井

福もろむは鼻緒をぬ

師休

波のさき千日も千事いづる

自一

家尾

通々や師之乃帝(鈴鶴) 聳身是角小領中(河内) 帝 計口(北)之(注)連(か)き(東)之(流) お(乃)流(く)し(と)う(て)放(つ)く(れ)座 にお(し)る(や)依(壁)の(底)等(及)み(の)色 一(番)並(乃)指(よ)り(し)り(と)身(乃)反 亦(堂)而(の)か(賀)の(光)や(う)の(行) と(の)流(産)を(く)人(を)作(急)

芳克 若全 一波 千志 新栄 可景 懷玉 常因

元旦

明(て)衣(綴)の(香)海(老)の(つ)き 山(雲)が(つ)つ(ひ)け(り)鶴(れ)は(翁)

一波 千志

雜日

く(川)春(や)七(十)日(身)此(空) 寸(先)形(し)ん(こ)そ(節)は(不)ぬ(の) 慶(子)房(る)比(八)例(さ)き(乃)解(ふ)

廣演 風樂 石壽 龍甫

同

財(来)る(糸)や(相)れ(乃)多(以)乃 弁(此)日(も)近(一)五(尺)守 お(座)る(と)う(続)尾(乃)尾(の)原(を)

土稿 千螺 雅穂 師亦

同

う(ろ)を(や)お(り)て(白)し(通)筋 篋(り)柱(き)横(の)子(女)代 八(童)庭(懸)れ(汝)之(吹)方(と)

生井 良道 〃 〃

歳尾

解菜や都北才の如き山
公傍の存言はたき道の跡
とれ尾や其れ研く雲丸
所の歌れ其れめもさるは
羽子板を賣るははるる

木志 破節 宣及 共流 名里

同

きほえれ隔し手やはの音
北景の帆とち振へ風は橋
注文は恋や川むの流

團弓 鹿曉 櫻

寺内立者

物入を帯れるるは此帝
下加す才安るは是の音
年北鞠おけりは此垣れ音

物点 鼓突 似休

同

皆嘆り松此下所 初を閑
明乃戸や日の絶より難の果
こや土地乃貞福委く盛外

衆人 可足 比風

守歳

杵よ嘆き其の正心言此枝

雅聰

盤石の音は遠

掛乞よいさ蓋を畏えん
字別れ忘れぬや亦も可
稀ふぬの果もては師走川
下しをきやおし不敷の男山
言はくは物もあはれは

均十 桃見 家臣 稚子 卷樹

盃の沖ふ風分り世に波
三車並銀箔の勝
君の幸民の勤も世に市
万石を存目を枕に世に白
掛乞乃氣や字言野隣
朝三
正行
百貫
有隣
比居

大之喧
初正さ三く三浩袖六八九並十二
均十

歳尾

危末や幸に程は内隣
宜しや運連の幸に夜確
幸に玉藻刈の氷泉
伸らうとる鶴はけに睦
子嚙
師休
幸化
百貫

雞旦

梅中笠岡

可山堂

雷きとやと幸を花の黒牡丹
子星に聞へらる教入
海山の彫ハ尤も陽光て
似錦
石壽
隨川

同

其善齋

初爰や相よをるぬ妹茄子
要の古根角くらふ以當
遠近乃系勒味ゆ立て
之景
同月
石壽

同

湘麓亭

去居て扇蕨の酢吸ひ正石
瓶々流るる聲は標
杵燕のよさの約をちん
之景
石壽

聖節

在聖堂

丑起子よや玉櫛首かき解

思等

葉三

川去や渾沈ひくけき津の山

龜六

余といふ養子と

丸山

大黒の榎うらも流れて三子と勢も

貝佐

よい子たうらと後入知を

榎とさや牡丹と確のうり色

之景

けき等のかきき流し市れ羽

同月

廻板よりや運しと大晦日

葉三

和南亭

これより茶や巻目けり忠

貞佐

手内立者

とやいとしん二とせれ色窓の鳥

同月

解花や古社大師れ衣字ハ

龜六

本を西阿隆の

二四 小之喧 法福と笑す

似錦

これ海も七十五日 志かう

雑目

佐中

角さ如や海老乃腰麻松の中

似作

多入れたることあり一月

柳點

さ月比えに緯多き程の程にて

千丈

同

笹山

高山を輝く大服やう後流

方蓋

僕よも君子三つに朝礼

千紅

旧靴こせぬ不厭ふ馬

柳點

同

今市

とく此蓋とれて衣を玉川む

紗袋

掃もて取く二君もあ

柳點

うらくよふ世用の代紙字そめて

文隨

石原

吹や春さほの安良れをうせ

文隨

宵解此法酒入れて玉

子蝶

とぬり山依りけぬ屋敷よて

石壽

同

尾崎

餌こしぬ三れ交る百代も

師牛

柳り垣はれ子句末孫

我足

是袋とてもまゝを何とて

友井

同

海申

福永のお墨白よ成の看

桃序

沸よとく海るこれこれ枝

文隨

宵あうる舟沸るこれこれ枝

梅兵

享保十七丑之歳

雑目

よき

のすちを

北越

又生可も胡鬼れふも阿の四天王

立儿

おを片むへくハ野の横子

立意

糸たて此磨も子夢よ越や

石壽

同

さ月比め此仕出— 雛形知朗

立意

田依り有てかきつんハ長布

石壽

俵ふあま椿後名候す

立儿

同

あしとこ心乃扱ぬる約籠

子犬

節うらるる忍守新の室

文隨

夜を隠のてうん遠山を踏て

子蝶



歳尾

珠も冷ん冬はうし櫓ハ蜻の舟
 帝一宵此色夜去の市
 元日乃うしハむつハ是れ貴
 せきそ路の鼻小幕とや子山
 笑也せん若も此の比やうし
 魚よ笑ふ岸 引れ津や岸は寄

節方夜

夜をこめて雑のこも色といはち
 やあそとあつたれの内報す

夜事屋内

枕心の風もいりせは
 誰之が
 立儿

歳旦

女席の顔見替てや初霞
 ろいぬをいそふの文字れいふ
 米仙乃換梅いよきそめ

全

鯉一朝流乃脂や滝登
 丑起尔拍子揃りや三の朝
 若迎て大眼を看も富見

臘庭

年此尾ふさふさかき一月
 公壁や餘情踏たる礼納
 菓の尾や車座はわく
 昨非

立意

子文

極悪

之隨

佳吉

良道

右義

千蝶

誰之が

立儿

昨非

吟雲

文翅

凸

共風

支諾

共風

凸

昨非

全

多のりてか立飛尔流ふくの流
年の内れ春や住古れ二ツ玉

吟雲

文魁

節季以

玉龜亭探題

うゝ白小壽の字いひと節季以

齊中

幸始

こち久と書あはしめ唯確の照

不偏

碁掃

下終居そむれし標の生北笑ひ

方壺

立春

本は春暁や志るむくの庭

丹丘

舞

丹後としかけ鶴此青柳の

尤樹

餅はき

餅隣三ツ地多居くや所はき

一鶴

歳首

一葉子

あさやい 流るもいらと初笑ひ

魚子

解ケく 法へて 庭尔可代

画をかたも玉と富む 庭うら 春ふ

空房

其二

うゝ案や初繁衣紋のりり如

寒房

南が節尔ふむふ 庭菜

一葉子

庭より 庭尔さち 庭に 庭けて

魚子

其三

うゝ川とせ 満るも此も先迄に

魚子

子星の外面 一と板れ思

空房

山の筑む時節 菜蝶節とて

一葉子

翠尾

波の瀬や流れてくさくさ一葉子

三瓊子棹あり翠尾もくさくさ魚子

万初の柳曳そめや年三寸流き宿

同

波風も年乃鳴戸の蓮葉龍角

月老や宮尾をさむく一夜風樂

定聲や成る質も梅過ひ千丈

同

我も人と鴨よそ多り年以後市貢

掛石やことあふ板乃年此人一族

鏡にまじり一樹一河れり志石壽

雞目

本風堂

初鷄乃風よそ朝のより所禮幹

試む魂うけよ梅の香

國師の如松東東屋も吹流て

同

紫雲雲子也舟を轉る竜鷄の文輔

藁二福神徳礼智如の海小隄川

初堂やいそや都に誘河ふる隣山

同

塙

初流いく棹をまり流ふ李風

万世の鷄と幹文乃昔代李下

冥と也解い志と必庭電純秀

年尾

さり初冬の美田宅に於て
逐一各事賑は日
後残りぬもれ
あつた如きをえて

右別の艶こそかさの 陰夜の星

禮幹

ぬきぬ 園ハ明康 碓氷

純秀

独活の懐の月 代や 河之川

聖賢

手此 歌や 遠山 京り 三首星

隣山

津りの院 於 景の 富士郡

文輔

信別より 白鷺の 去過也

そりて 見て 春を 野上 作の 鳥

止之研

和雪や 春の 好ハ 羽を け け け

車馬の 吃

雜日

古著や 景 組から 於 楠木 とい

爾子

羨 飯下 鉤乃 志 びす 乃 色

霞曉

笠 台羽 敷 鳥 かな ようり 迎て

石壽

同

世ハ 唐し 初 山つ づ 紅 雀 以 尾

霞曉

五 此 春 風 迷 也 くら 翁

爾子

公道 も ちる づ さら づ 比 和 礼 以 て

音祇

同

若 樂り 分 春 ち 凡 所 万 止

止之研

い さ び 下 明 日 玉 多 任 こ づ ち

石壽

嵐 子 羽 角 カ 登 也 き ち ち ち ち

立儿

雞日

初鶴やそはさくはきふ

槐新文

以琢

半比苜のありは産

素桐

返そむる天人目うぬ魚はさて

助角

歳首廻文之賀無

南紀

環亮舎

楮林

後すしは妻之門去初う分

ゆふりそむむ物通う各

年一節かこる者新書未肥て

歳暮 廻文

海らりこき原らりあき

楮林

せめて産守さるむらん

止之

むハ根や鶏の首はて着比年

以琢

雞日

泉尾崎

氣の長そ梅年ひひ

我足

より来るおもひとむ月

石壽

雪は艶方と九童年結す

百花

同

ふも実そ福の誠計れ者

菊菜

車乃乃くまのん

百花

身子凡中ハ何て

佳吉

同

瑞光

明の方

佳吉



やうし(寝せて)銅たる(二)蓋
志る(も)らぬ(も)ぬ(る)く(此)園
ぬけて(系)る(に)生(を)せ(し)
有(も)や(袖)て(抱)へ(る)腰(れ)もの
物(り)こ(と)ぬ(も)の(此)れ
系(せて)出(し)小(の)舞(の)り
出(て)老(る)茶(を)て(燈)を(吹)き(消)さ(し)
は(り)元(も)花(を)む(り)の(止)れ(事)

景尾

鏡もあり一樹一河(此)事(志)

石壽

初(も)鳥(り)花(を)れ(若)乃(れ)花(を)世

麟牛

手(内)立(者)

春(も)不(さ)く(ら)ん(袖)の(除)之(が)

露曉

若(も)も(羽)織(は)色(年)を(け)

我足

桜(て)く(さ)ひ(と)ひ(お)と(す)む
指(さ)き(あ)ら(ふ)が(ら)ひ(此)の(家)
敬(一)つ(け)今(り)う(を)き(好)
が(家)袋(て)見(え)ま(つ)お(と)花(虫)
山(は)こ(の)嘆(も)も(を)て(か)ら(り)ん
画(師)れ(二)階(一)舞(を)れ(を)
よ(の)因(易)よ(て)花(は)ら(る)ず
州(の)乳(母)ら(ね)を(不)さ(す)寸
う(の)系(法)事(一)れ(も)然(交)
星(見)の(地)々(を)た(す)ん(也)
抱(一)お(ひ)う(て)破(を)お(る)奇
振(舞)る(る)る(く)産(知)一(珠)
車(より)志(ら)ま(れ)か(ら)れ(か)を(奇)
板(の)乃(は)く(破)の(乃)も(る)
系(は)る(る)永(い)後(法)
去(よ)と(敷)く(巾)れ(て)愛(化)

こ味又人のえ入るぬさる刀箱
くしらぬ金骨を不むる玉拍
一星を輝け雁いん
履うへて来てそれえん
刀の質よりあまりてあす
中に入奉りて出れあはる
口上の塵をおろす月解ぬ
片終の紅をつめり紅日
を以て月此樂をて冬松
終りてこく陽の光
いとこれりも飛遠石
梶よ響の紅よこ月
物解心あわすこと月の
入物いあり思こよあきけ
日よ以浦さくく古松を月建て
南憶とえり一并れ月

庵よも着てこよ正成扇
ひききてて赤台あつて卒と封
長いあ後こり一りけて旅
くく川へ廻る中もあは白戸
をいりてあつていひ屋文
車はるのこりしまつわ
夜心よてを心りさぬ持葉
蕨くし出れ序をさる
前故よハワとと先はて常産
月香さるさみさる一夏
羽織ぬましく詠歌さる
月代とりゆいあす響
ぬき原を新ての思
土車れ物とハあ新を
秋杞の吸露しを陰見
いさくさきさるけりけけけい

青て凡さるむすめふけて又へ
右我をやめて古とれ侍交さや
辛引も伊達を暫女は名は
呼進一羽織の壺を搦てどう
大膽に被れ侍れたまうら
笑ひいそてぬ強物ゆえ
突りて血染はへ濡て座の
た後ろてマビくまいてヤリ焼てマオ
ぬきりさしそく家のなる角
古海を考て母の屍さ
たて昇下せる 咄 中下
穴此 何うか石一とんと立けを
かき海のかさの巾い高よぬて
剣衣るまぬ 硬あけりて
案引 引るさ士り御不
子 居つて老れらぬお産

宵やんちと誂い秋もさやら
のむこいみうきみあてい若
界あふ底る角上高も
昔己けの赤もさうす車れ婦
尚世ぬぬうせいりんいりさくふ
らうそくれんつうむ流泉
己けを稼ようけて星宮
芽るぬ一又兄の跡め
総て千世界をみるこつ月
えゆは貴へらさうらう家
子高れ海の秋おさし月
男踏下角くむくさめ山
かくぬれりも高士上塚を
禱りけらて名の他い
子高れひひき居て高かざ
陰産川抱えりてさあてつ腹

口うさきして行以以
牧原よま川をさりて口
沼あてさき、河はのち井戸
隣れ地り、極ゆる、後
水尻の土肥の松山めり、ち
おと、他ぬ子、信守府の六斗、
ま、中、野ひ、折、ちあきさ
即それ、ち、好、ち、ま、好、ち
如口の、た、な、て、お、ち、の、ち、と
あ、ち、ち、同、乃、河、ほ、も、ち、の
境、ち、ら、ち、ち、一、社、正、乃、人、不
藤、り、と、ち、使、れ、ち、ち、も、ち、ち、ち、
同、ち、ち、ち、一、部、の、ち、ち、ち、
さ、ち、ち、ち、一、と、社、の、ち、ち、ち、
口、ち、ち、ち、所、の、ち、ち、ち、
ち、ち、ち、中、ち、ち、ち、ち、ち、ち、

あき

